The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

智旭『金剛経破空論』における「応如是生清浄心」の解釈について

篠田昌宜

一　はじめに―問題の所在―

『金剛経破空論』（以下『破空論』）は智旭（一五九九―一六五五）の四十二歳の著作である。本稿では智旭が『金剛経』における「是故に須菩提よ。諸菩薩摩訶薩は応に是の如く清浄心を生じ、応に色に住せずして心を生じ、応に声香味触法に住せずして心を生ず。応に住する所無くして其の心を生ずるなり」（大正蔵八巻、七四九下）における解釈に焦点を当て考察をすることにしたい。智旭は後世の諸師によってその部分の解釈が言葉にとらわれ深い意味を理解していない解釈をしていると批判する。具体的には『指月録』や宗密（七八〇―八四一）の『金剛般若経疏論纂要』（以下『纂要』）の内容を批判するものと筆者は考える。智旭が『宗論』において禅宗をだめなものにしてしまったと『指月録』を批判しており、その批判の原因を考える上でも重要な手がかりと思われる。また、時代を遡ればそれは宗密の『纂要』に行き着くものである。これまで筆者は智旭が宗密の教学を批判の対象としていることを筆者は先行研究の中で明らかにしてきた。本稿もそのことを再確認する上で重要な考察とかんがえる。

具体的な内容を見てゆくと『指月録』では『金剛経』の「清浄心」を「自性清浄心」と解釈し、宗密の『纂要』においても同様である。智旭は『破空論』において「応に住する所無くして其の心を生ず」の内容を「六度万行の心」つまり六波羅蜜を行ずるベースとして「心」を解釈する。これは有漏・無漏を内包する「心」と智旭は理解するのである。

智旭が『金剛経』の「応如是生清浄心」の解釈における問題点を指摘する箇所を見てみたい。以下、具体的に見てみよう。

①『金剛経』における「応如是生清浄心」と「生心」を智旭は同じものとしては解釈していない。

宗密や他の禅籍をみると「応如是生清浄心」と「生心」

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の二つを自性清浄心として解釈している。宗密などは正智という言葉を用いている。智旭は後半の「生心」については「生六度万行心」と解釈する。それは清浄心の本体に有漏・無漏の六度万行を備えている事を意味している。六度万行とは天台教学でいう修徳、つまり諸法実相のあり方を理解するための智慧と修行という内容に限定するのである。それは「生心」という『金剛経』の言葉を文字どおりに解釈することを否定するためである。

②智旭は六祖慧能が『金剛経』の「応無所住而生其心」の語をきいて仏祖単伝の法を理解した逸話を引く。『金剛経』における無住と生心の関係を四教や六即説にあてはめて解釈する。円教の無住と生心の理解のレベルは浄土の真因と述べる。往生浄土の因という意味で解釈はしていない。智旭は『金剛経』の理解の方法を示すと同時に、惠能の風幡の逸話の解釈をも自らが正しいものと示そうとする。

二　『金剛経破空論』について

まず、先行研究にふれてみたい。明末とくに智旭に関するまとまった研究成果としては張聖厳氏の『明末中国仏教の研究』(1)がある。明清代の『金剛経』の注釈書に関する研究としては岩城英規氏の研究(2)が挙げられる。岩城氏は時代を明代以前と明代と清代にわけ『金剛経』における「応無所住而生其心」の解釈の特徴を述べている。岩城氏は『破空論』についても言及している。智旭特有の「生心」の解釈である六度万行の心とは何か、そしてそれは具体的にはどのような事を念頭に置いての批判かは述べられていない。

次に『破空論』が著されることになった経緯をみてみよう。智旭は一六四〇年、四十二歳のときに『破空論』一巻と『金剛経観心釈』一巻を著している。『破空論』における「破空」について以下のように述べる。多くの道理の分からない人々が空を強調するあまりに間違った空の理解をする人々を正さんがために如実不空の意味を述べるのだという。不空はあまねく諸々の愚かな論を打ち破るものであり、仏の教えにしたがうが故に「破空」と名づけるのだという。(3) 六度万行の心をめぐり『金剛経』「無住」と「生心」について理解をすれば、それは浄土(4)の真実のありのままの姿を理解するよすがとなるものだという。

三　智旭の批判の相手をめぐって

『破空論』では宗密の『金剛般若経疏論纂要』をはじめとして宋代の『林間録』や明代の『指月録』における「応無所住而生其心」の解釈を批判している。では『破空論』以外ではどうであるかを確認することにしたい。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

智旭が『閲蔵知津』[5]では宗密（七八〇―八四一）『禅源諸詮集都序』の中で宗密が独自の天台教学の理解をする箇所を批判する事などを指摘した。また『大乗起信論裂網疏』について研究してゆく過程で、主に華厳の祖師達である法蔵（六四三―七一二）や宗密や子璿（九六五―一〇八三）を批判していることが考察できた。

四　『破空論』原文の検証作業について

まず最初に智旭『破空論』における『金剛経』「応如是生清浄心」の解釈についてみてみよう。禅宗の典籍と、さらにまた宗密の『金剛般若経疏論纂要』などが、言葉や文章にとらわれたままのレベルで深い仏の真実に到達していない事を問題とする智旭の批判を見てみよう。

是故。須菩提。諸菩薩摩訶薩。応如是生清浄心。不応住色生心。不応住声香味触法生心。応無所住而生其心。

生心無住二非二　了無二義名浄心

浄心六度浄土因　是故菩薩応修学

論曰。此承上離相荘厳之土。而正示離相荘厳之行也。応如是生清浄心者。即是三檀六度妙行之心。以其不住色等六塵。故名清浄。但誡令勿住六度。非教令不生心也。終日生心。終日無住。終日無住。終日生心。惟生心故無住。惟無住故生心。説雖有二。義実非二。了此方名浄心。必尅浄土妙果。[6]

智旭は「生心」とは六度万行の心を生ずることであると解釈する。智旭が六度万行を修徳の内容としてのべる。それは「生心」という言葉のみが独走することを危惧したものと思われる。六度万行は有漏無漏ともにあるもので、修徳としてのありかたがそのまま性具であるという。三檀六度妙行の心とも解釈されている。つまり、迷いから悟りの世界のありのままの姿を備わらせ現れると同時に、修行を成し遂げれば修行と仏の悟りとは、離れることはないというのである。

次に六祖慧能が『金剛経』の「応無所住而生其心」を聞いて仏祖単伝の教えを理解したと述べ、後世には恵能のように理解をする人間はおらず、言葉や文字にとらわれて理解にまでは至らないと批判する箇所を見てみよう。

所以六祖一聞此語。頓悟真乗。後世承言滞句。罕達深宗。惟幽溪師般若融心論。頗窺堂奥。今応略述其意。言無住者。不住諸有為相也。言生心者。生六度万行心也。自有生心而不能無住者。事度菩薩是也。自有無住而不能生心者。蔵通二乗是也。自有先生心而後無住者。蔵通仏果是也。自有先無住而後生心者。出仮菩薩是也。自有無住非生心。生心非無住者。別教地前是也。自有即無住而生心。即生心而無住者。別教地上及円教名字位去是也。別教雖界外法。於此二義。始猶分二。後方不二。惟円教行人。従始至終。了達非二。是故円観最為浄土真因。

復次。一切凡夫。妄於三界種種取著。恒住六塵。究竟推之。心境遞遷。何嘗有住。是謂理即無住。一切二乗。妄於偏真。灰心泯智。離分段生。尽理言之。変易全在。何嘗不生。是謂理即生心。円人了知住即無住。無生即生。従此故有名字無住生心。乃至究竟無住

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

生心。復次。言無住者。不住生死。不住涅槃。不住二辺。不住中道。故名無住。言生心者。生上求心。生下化心。生折伏心。生摂受心。徧於法界。窮於三際。故名生心。今人聞空。便取於空。尚非無住少分之旨。況生清浄心耶。

智旭は幽渓伝燈の『般若融心論』については奥深いものをさぐりあてていると述べている。無住については、有為相を心にとどめないことであるとし、生心との関係で六度万行の心を説明する。つまり「心にとどめず、心を生じる」理想の姿を六度万行の心のあり方に見ようとするのである。無住と生心のありかたを智旭は四教と六即で説明をする。

五　おわりに

中国仏教においては古くは僧肇・謝礼運・智顗・吉蔵・智儼・基・恵能・曇曠・宗密・子璿などの手により『金剛経』は註釈されてきた。本稿では禅宗における『金剛経』の依用という問題を含みながらも南宗北宗といった難しい課題にはふれず、立ち入らなかった。明末の智旭の『破空論』のみに焦点をあて、『金剛経』のクライマックスの部分にあたる「応無所住而生其心」の解釈を中心として考察した。明末や清代には『首楞厳経』や『金剛経』にたいして非常に多くの注釈書が著された。本発表において智旭の天台教学を全面に据えた『金剛経』の解釈の一面をあきらかにできた。華厳教学やその影響を受けた禅宗に属する人々の注釈書を「承言滞句」と述べる評価を下し、自らの解釈を通じて明末に流行した禅宗のあり方に異義を唱えたものと思われる。

1　山喜房仏書林、一九七五年十一月。
2　岩城英規「明清代の『金剛経』解釈―「応無所住而生其心」解釈の変遷―」（『印度学仏教学研究』四八―一、一九九九年）。
3　『破空論』「為治羣盲悪取空　欲申如実不空義　不空徧破衆戯論　順悉檀故名破空」（卍大日本続蔵経二五巻、一三三上）。
4　智旭『宗論』「合刻弥陀金剛二経序」（荒木見悟・岡田武彦主編『宗論』六・四五頁、中文出版社）では、『金剛経』の荘厳仏土について「荘厳」とは唯心浄土の誠証なりと述べる。
5　篠田昌宜「智旭の『閲蔵知津』における宗密『禅源諸詮集都序』批判について」（『印度学仏教学研究』五七―一、二〇〇八年十二月）。
6　『破空論』（卍大日本続蔵経二五巻、一三九上）。

〈キーワード〉　応如是生清浄心、『金剛経』、智旭、自性清浄心、『指月録』、心

（駒澤大学大学院満期退学）

NII-Electronic Library Service